

—専修学校歌—

黄金コンビによって誕生

高野 辰之(たかの たつゆき)-作歌 信時 潔(のぶとき きよし)-作曲

専修大学の校歌は、今から80年前、1926年(大15)に制定された。1923年(大12)の関東大震災で本学も灰燼(かいじん)に帰したが、いち早く学生会が結成され、教職員と力を合わせ復興に立ち上がった。この中で校旗が制定され、学生会では文化・スポーツ振興を目指し、多分野のサークルをスタートさせた。そうした機運を背景として、多年の懸案だった校歌の制定が建議され、1年の儀を経て25年(大14)、白羽の矢を立てたのが高野辰之氏と信時潔氏だった。

当時、高野、信時両氏は東京音楽学校(現・東京芸大)教授として教鞭をとり、ともに日本音楽界の第一人者として活躍していた。この、他に類を見ない黄金コンビにより1年後、本学の校歌が完成を見た。なお、校歌制定時には「儀式用」「応援用」の二つの歌詞・楽譜があり、現在歌われているのは儀式用である。制定から80年にあたり、改めて偉人とも言うべき両先生のプロフィールを紹介しよう。



長野県中野市にある高野辰之の記念館と銅像

専修大学校歌

<儀式用>

<応援用>



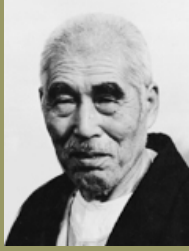
高野 辰之
<高野辰之の記念館提供>

高野 辰之 (たかの たつゆき)

1876年(明治9)長野県北部の豊田村(現・中野市)に生まれる。(東京音楽学校教授)上田万年文学博士のもと、国語、国文学を研究、東京帝国大学(現・東大)から文学博士の学位を取得した国文学者。文部省在職中には小学校唱歌教科書編纂委員として、広く国民に愛唱される名歌を発表した。♪兎追いしかの山 小鮒(こぶな)釣りしかの川♪で始まる「故郷(ふるさと)」のほか「紅葉(もみじ)」「朧月夜(おぼろづきよ)」など、日本のこころ、ふるさとのこころをうたった作品が多い。また、小学校から大学まで多くの校歌・応援歌を手がけている。

長野から飯山線・替佐(かえさ)駅下車、タクシーで10分ほどの所に「高野辰之記念館」(電

話 0269・38・3070)がある。



信時 潔

信時 潔 (のぶとき きよし)

1887年(明治20)大阪府に生まれる。幼少時は牧師の父の影響もあって、賛美歌に親しんだ。東京音楽学校教授として同校の作曲部創設に尽力したほか音楽教科書の編纂も手がけた。

日本の伝統音楽を取り入れた、交声曲「東海東征」、歌曲「沙羅」、戦時歌謡(国民唱歌)の「海ゆかば」、ピアノ組曲の「木の葉集」などのほか、合唱曲、ヴァイオリン曲を次々に発表。特に声楽曲、歌曲作家として名高い。最も親しまれている曲は「一番星みつけた」ではなかろうか。そのほか多くの校歌、社歌、団体歌などを残している。今年(2005年)は没後40年にあたり、著書や音楽CDが発売になるなど、国民的作曲家として、にわかに脚光を浴びている。

校友短信

◆衆院選当選者◆

◇千葉12区

浜田 靖一氏(はまだ・やすかず=昭55経営)自民前。元防衛庁副長官。
(選挙追加)

◇埼玉6区

中根 一幸氏(なかね・かずゆき=平12院法修)自民新。

◇石川1区

馳 浩氏(はせ・ひろし=昭59文)自民前。本学レスリング部監督。

◇比例南関東

内山 晃氏(うちやま・あきら=昭51商)民主前。社会保険労務士。

校友会からのお知らせ

<岩手県連合総会>

▽日時=9月24日(土)17時~▽場所=北上市「シティプラザ北上」

<ホテル専修会総会>

▽日時=9月28日(水)18時~▽場所=千代田区「東京ジョンブル」

<阿賀北黒門会総会>

▽日時=9月30日(金)18時30分~▽場所=新発田市「四川料理 長江」

<町田支部総会>

▽日時=10月10日(月)17時45分~▽場所=町田市「町田市民ホール」

<岐阜県連合総会>

▽日時=10月15日(土)18時~▽場所=岐阜市「ぱ・る・るプラザ岐阜」

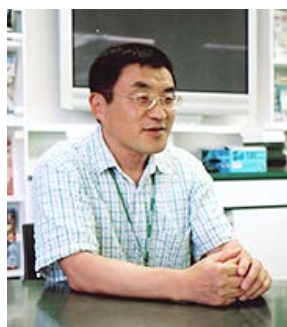
<32会総会>

▽日時=10月22日(土)12時30分~▽場所=神田校舎15階ホール

《専大校友を訪ねて》

会計士 — 外資系…今「仕事は楽しく」

— デアゴスティーニ 新しい形の出版展開 大谷秀之(おおやひでゆき)さん(昭50商)



群馬県太田高校時代、叔父に勧められ、公認会計士を目指した。商学部会計学科に進学し、合格率9%前後という難関に一意専心、現役合格を果たした。

卒業後、当時ビッグエイトと呼ばれた米国系会計事務所に勤務。語学を身につけようと、英国留学もした。公認会計士という安定した資格を得て、厳しい外資系でもまれながらも、順風満帆にみえた。だが、20代半ばで立ち止まった。「このままで、いいのだろうか」。悩んだ末の結論が「10年以内に企業のトップに立つ」。

映画配給のワーナー・ブラザーズ、半導体メーカーのインテルを経て、人脈を培った。自らを凡人と評し、他人の倍、時間がかかっても、成し遂げる努力をいとわず続けてきた。

88年、ワーナー・ブラザーズのビデオ部門の日本代表に抜擢された。この時35歳。“決意”から1年早い9年後のことだ。誰よりも早く出社し、最後に社を出る毎日。懸命に働き、業績は順調だった。しかしある時、「明日のために」ではなく「今日のために」仕事をこなすようになった自分の姿に気づく。就任から10年。「引き時とと思いました」。

その後移ったのが、イタリア生まれの「デアゴスティーニ・ジャパン」。ひとつのテーマを分冊で完成させるパートワーク方式が話題の出版社だ。日本市場ではパイオニア的存在。

「『ものをつくる』ことは人間の原点。最高の営みを得ました」

2003年、50歳で代表取締役社長に就任。誠実な取り組みは変わらないが、がむしゃらだったワーナー時代に比べ、肩の力が抜けた。「仕事は楽しく」と、社員にものびのびとした仕事を求めている。

10月15日、30年ぶりに生田キャンパスを訪れ、講師を務める。

考えたテーマは「負けない人生」。試行錯誤し、自己流で突破した学生時代の受験体験が「負けない人生」の支えになった。